柳川文庫ができるまで

島薗 進

この度、故柳川啓一先生のご蔵書の多くをご遺族より宗教学研究室にご寄贈いただいた。ことの経緯はあらまし以下のとおりである。

私が東大に赴任したのは１９８７年だったが、そのときかつて「猿の部屋」とよばれた由緒あるお部屋を使わせていただくことになった。この部屋は私が大学院に入学した頃、今の「水曜ゼミ」、すなわち全教官が出席して大学院生が研究発表を行う、厳粛にして荘重なる東大宗教学科の「秘儀」が行われる場所であった。そう、あの法文二号館四階の中央吹き抜け螺旋階段脇、男子トイレ前の部屋である。

それが「猿の部屋」と言われたのは、宗教学科の事情によるものではない。文学部某学科が実験のために飼育する猿の匂いが、ほのかに漂ったというやや不本意なる事態に基づいている。話がそれるが、匂いには不快を催されるとしても、猿が檻をゆするあのガチャガチャという音は懐かしいと思われる方々もおられるやもしれぬ。幸か不幸か昨今、匂いとともにあの音も去った。猿は居所を変えたようである。

この「猿の部屋」はその後、脇本、柳川両先生の研究室となった。両先生ともご退官まで、あの匂いと夏の暑さと冬の寒さに耐え、いささかの不平をもらされることもなく、黙々と職務をまっとうされたのであった。なお、今この部屋は私と鶴岡助教授が使っているが、１９９９年８月、めでたく初めて冷房の恩恵に浴することになった。

金井主任教授はかつて田丸、後藤両先生が使っておられた部屋におられるが、この部屋にはまだ冷房設備がないのは私どものたいへん遺憾とするところである。暖房について言うと、どちらの部屋も四階に位置するため、三階の諸室が暖房機を全開する冬には暖気が十分に行き届かないという、スティームというものの機能の欠点（もしかすると東大のスティームに固有の欠点かもしれず今後の究明が待たれる）に悩まされ続けている。

話を本筋に戻そう。８７年に私が着任し、その由緒ある「猿の部屋」に落ち着いたとき、百冊ほどの洋書がラベルを付されることなく、書架に置かれていることに気がついた。レヴィ＝ストロース、マイケル・ポランニ、ロドニー・ニーダムといった１９６０年代、７０年代の輝かしい世界の知性の業績が、主にハードカバーの重々しいたたずまいでひっそりと並んでいたのである。

それらが柳川先生のご蔵書の一部であるということはすぐにわかった。７０年代前半に柳川先生の講筵に列していた私は、他の学生院生のめんめんと同様、先生がキラキラ輝く欧米の最新の知的冒険の魅力を、いち早く伝えて下さるその手際に魅了されていたからである。そして、やがて柳川先生のご自宅のお仕事の空間がけっしてゆとりあるものとはいえないものであったことも存じ上げるようにもなったからである。教官用の研究室の書架はおおかた研究室の蔵書で満たされており、私蔵の書物を置く場所はごくわずかである。だが、もしわずかなりともスペースがあるのなら、どうしてそこを利用しないでいられようか。

柳川先生が退官された後、田丸、後藤、金井の諸先生がそのご蔵書に手をふれられなかったわけはわかる。柳川先生が自らそれを引き上げるとおっしゃらないのに、こちらからそのようなことを申し上げるのは畏れ多い。いやいやそれよりも、その一隅には、「眠りカバ」ともよばれたあの柳川先生の温顔やジョークがほんのりと残っているようで、いつまでもとどまっていて当然だと感じておられたからであろう。私とてその気持ちにかわりはなく、先生が亡くなられた後も、とくに手を触れようという考えは起こらなかった。その後、柳川淑子夫人より、先生が来ておられた本郷レリギ

オーズの野球のユニフォームをいただいたりもした。「猿の部屋」の柳川スペースはますます聖なるものになろうとしていた。

さて、その柳川先生の聖なるご蔵書を研究室図書としてご寄贈いただけないかご相談しようという話がもちあがったのは、とりあえず「もったいない」というところから来ている。とにかく良い本が多いのである。大学院生らが利用できればそれにこしたことはない。しかし、今のままではそこにそういう本があるということを知っている人はごくわずかである。だが、もしかするとご遺族は懐かしいご蔵書をお引き取りになりたいとおっしゃるかもしれない。とにかくご遺族のお考えをうかがおうということで、淑子夫人にご相談したのは九七年のことである。ところが話は意外な方向へと進むことになった。

実は先生のご蔵書の一部は、ご自宅でも何十箱もダンボールに詰まって重ねられたままであるとおっしゃる。それならばそのご自宅に残されているご蔵書も、研究室のものとともにご寄贈下さると言われるのである。これは願ってもないことであるが、東大退官後移られた國學院大學の意向もあろうし、先輩諸先生方のお考えもあろう。そこで京都大学の薗田稔先生にご相談したところ、柳川先生のご蔵書のおおよそがわかるような形で整理をした上でなら、東大で引き取らせていただいてよいのではないかとご助言をいただいた。薗田先生は他に場所がない場合、秩父神社に引き取られるという可能性も考えられたようだが、後進の者たちが参看するという便宜を考えれば、東大でいただいて保管する方がよかろうとおっしゃって下さった。

このあたりから、村上興匡助手の大車輪の活躍となる。ご遺族とご相談しながら手順を決め、いったん箱に詰まった書物すべてをお預かりし、整理した上でそれらを記録し、お引き取りいただくものと研究室にいただくものを分別するという作業が始まった。

文学部図書館の方々の協力を得てスペースをいただき、院生、学生諸君のアルバイトで整理が進められた。淑子夫人をはじめとするご遺族の皆様のご尽力にどれほど助けられたかは申すまでもない。たまたま柳川家とお宅が近い教務補佐員の伊ヶ崎美恵子さんや、宗教学に縁が深い正門前の古書店兼出版社、第一書房の村口一雄社長にも大いにお手伝いいただいた。文学部図書館の松本課長にも事情をご理解いただき便宜を図っていただいた。

和書の方はすでに研究室や文学部にあるものが多く、重複所蔵することになり、図書館側もそれには積極的ではないので、ごく一部だけをちょうだいすることとなった。だが、その中にはたいへん貴重なものも多い。これまでぜひともほしいと思っていた書物なども含まれている。洋書の方は多くをいただくことになったが、こちらは柳川先生のご関心のありかを知ることができるとともに、今も研究に必要な基礎文献が少なくない。

かくして１９９９年春、東大文学部宗教学研究室所蔵の柳川文庫が設置されるに至った。ご存じのとおり、図書配備のスペースはきつく、あちこちに散らばって置いておかざるをえない状態が続いている。現在、柳川文庫は登録整備中であるが、ごく近い将来には検索によってその場所を調べ、貸し出しもできるようになる。恩恵に預かる者の多くは、これらの書物があの「猿の部屋」の一角に由来するものであることは知らない。さて、ではその一角は今どうなっているか。読者諸氏のご想像にお任せしよう。

ともあれ後進の宗教学研究者が柳川文庫の恩恵に浴することができるようになったことを、東大文学部と嘲風会の諸氏とともに心より喜び、ご協力いただいた関係者各位に感謝の言葉を申し述べたい。だが、何よりも、ご寄贈下さった柳川家の皆様のご好意に厚くお礼を申し上げる。単にご寄贈いただいたということだけでなく、この間、淑子夫人、三季夫さん他、柳川家の皆様にはたいへんお世話になった。生前の先生のことなど記憶になかったことをたくさんうかがい、楽しい語り合いの時をもつことができたのは思わぬ役得であった。村上助手は柳川先生の東大ご退官前の、最後の教え子のひとりである。柳川文庫を眺めるとき、私個人は淑子夫人のいかにも懐かしげな思い出のお話と村上興匡助手の献身的な仕事ぶりを、その都度思い浮かべずにはいられないだろう。